

「修士論文」は[創作料理]のごと・・・をかし

放送大学大学院修士全科生（2014年3月修了）田中暁子

念願かなって、2012年4月修士全科生となった。放送大学に編入してから12年間は過ぎていた。所属は「文化情報学プログラム」で、研究題目は、『『古典和歌の力』を探る—自然の光景と人間の心の響き合い—』とし、大まかな「修論の章立て」も考えていた。

研究指導は、4月21日(土)に開催された「研究指導オリエンテーション」から始まった。ここでは、文化・情報学プログラム所属の各教授から、「修士論文の書き方」についての話があった。大多数の教授が話されたことは、“「自分らしい、自分の身の丈に合った修士論文」を書いて下さい”と“「何が何でもやり抜こう」という気持ちを持って書いて下さい”の2点であった。その時私は、自分自身の脳裏にこの2点を強くインプットした。

午後は各ゼミグループに分かれて、担当のS教授(日本文学)から、「今後のゼミの進め方」の説明があった。所属学生10名で構成されていた。今回のゼミグループでは、テーマは、各自各様でバラエティに富んでいた。中には、学部で卒論を書いてから20年目に当る人がいた。私は10年目に当たっていた。これで、修論制作の環境が整ったのであった。

『修論の書き方』なる参考本を読むと、「先達の書いた修論を読んで参考にする」との示唆が多かったので、阪大の学生さん達の修論を閲覧したいと思った。そこで、放送大学大阪SC所属のK先生に、事務所を通じて「阪大生の修論閲覧の依頼」をして頂いた。K先生は、「修論を閲覧しなくても、筆者が書いた内容は論文の一種なのだから参考文献を読めば十分です」と言われ、古典和歌文学研究の核になる2冊の参考本を紹介して下さいました。それは、①鈴木日出男著『古代和歌史論』東京大学出版会1990年と、②片桐洋一著『古今和歌集以後』笠間書院版2000年であった。①はネットで購入した。②はネットで検索したが絶版になっていて古書も入手出来ない状態であった。東京の友人にも探して貰ったが、早稲田大学の図書館にあるのみだとのことであった。それが何と、大阪府立図書館で見つかったのだった。その時の嬉しさと驚きは言い表し難い。

この2冊の参考本を中心に、修論制作[調理]に入ったのだった。

創作料理で言えば、[メニュー名とメインディッシュ]が決まったわけである。あとは、どのように書き進めて[調理して]いくかが問題である。関連した多くの参考本を読み解き[多くの材料を調理し]、満足のゆく修論に仕上げる[美味しい料理に仕上げる]べく、努力するのみである。それから約20カ月間、修論制作[創作料理の調理]は、常時、私の頭の70%以上を占領する課題となっていた。



2014年3月23日(祝)「放送大学創立30周年記念 卒業・修了祝賀パーティ」より

第1章は、基本に忠実に「和歌とは」に。第2章は、「古典和歌の表現」「心情」と「景物」の関係。レトリックによる表現。歌ことば表現。『古今和歌集』掲載の狭義の歌枕の編集。我が町「交野市」と歌枕等。第3章は、「近世文学と和歌」。第4章は、「現代に引き継がれる和歌(短歌)」。第5章は、「今後の和歌文学」とした。創作料理の[サイドメニュー]が決まったわけである。

以上のように盛り沢山の項目を掲げたので、今後、沢山の文献[食材]を駆使し、これらをどのように書き表す[調理する]かが問題である。そこでは、言葉のスパイス[食材のスパイス]を上手に遣い[入れ込み]、味わい深い妙味溢れる修士論文[美味しい創作料理]を仕上げるつもりであった。

それは、常に持ち時間との戦いであった。途中で、取り込みたい内容[料理]が出てきて、その中身は膨らむばかりであった。この時点でも、まとめの段階で「取捨選択」し、内容の凝縮した修士論文[創作料理]を仕上げる予定でいた。修論提出メ切日間際[調理の持ち時間ぎりぎり]になり、結局、論文全体の見直し[料理の盛り付け修正]をする時間が無くなってしまった。こんな訳で、厩大に膨らんだ修士論文を提出する羽目になった。修論を書き終えた満足感はあるが、自分の思い通りに書き上げられなかった痛恨の思いも大きい。

ほろ苦い修論制作体験談です。

